Existential *there* 管見

——その 1——

秋 山 庵 然

0. この小論では，いわゆる「*There* 構文」における *there* について考察しようとするものである。前半では，この構文のもつ意味構造について述べ，後半では，変形文法におけるこの構文の扱い方とその問題点について解明を試みようとするものである。

ここで言う Existential *there* とは，There＋V . . . のように平叙文では文頭にたち[1]，副詞としての「そこに」という場所的意味をもたず，（つまり，'in [at, to] that place' を意味する *there* ではなくて）多くは *be* 動詞の諸形が続行する *there* のことを言う。

この *there* を特別に取りあげるということについては，文法家たちの考えは一致しているが，その解釈とその名称については，それぞれ異なっている。例を挙げれば，無慮次のようになろう。

Curm	:'Anticipatory *there*' (*Syntax* p.9. ff.)
Fries	:'Function Word *there*'(*American English Grammar* pp.244–245.)
Hook-Mathews	:'Expletive *there*' (*Modern American Grammar and Usage* p. 230.)
Jespersen	:'Preparatory *there*' (*Essentials of English Grammar* § 10.8_2.)
———	:'Existential *there*' (*Modern English Grammar* VII 3.1 ff.)
Kuruisinga	:'Formal or Introductory *there*' (*Handbook of Present-day English* 2078.)
Roberts	:'Structure Word *there*'(*Understanding English* p.180.)
Sweet	:'Form-Word or Weak *there*' (*New English Grammar*

Part I § 344.)

Zandvoort: 'Unstressed *there*' (*A Handbook of English Grammar* § 684.)

本稿では，*There* 構文が「存在」・「出現」の意味要素をもっているので（ほかの名称を拒否する crucial な理由はないが），一応，Jespersen の 'Existential *there*'（「存在の *there*」）を使用した[2]。

1.0. 英語には，存在をあらわす構文は二つあって，一つは(1)のような「主題＋is」であり，もう一つは *there* を用いる(2)のような構文「*there* is＋主題」である。

(1) A book is [exists] on the desk.[3]

(2) *There is* a book on the desk.

この *there* には「そこに」の指示副詞としての意味はなく，ただ存在をあらわす表現形式の導入的な役目をしているにすぎない。したがって，

(3) *There* is only one Tangent *here*, and that is me.[4]

(4) *There* was nothing *there*.

のように，同一文中で here, there などを使うことが可能である。そしてこの *there* は弱形 [ðə] で発音され，there is (there's), there are はそれぞれ [ðər iz (ðəz)], [ðərə] となり，「そこに」の意味をもつ指示副詞の there の発音 [ðéə] と区別される。

1.1. *There* 構文の性質の特異性は，結局，意味構造の性質に由来しているものと考えられる。つまり，There is a book on the desk. という文の意味するものは，主題 (a book) がはじめて知覚されたとき，これを承認するという単純判断にすぎない[5]。従って，その本について何らの陳述をする意図がないのであるから，a book が主語の位置に来るのは不適当である。と，なると，主語の位置がカラッポになってしまうことになる。英語という言語は，その語順がＳＶＯの典型的なものゝうちの一つであろうから，文頭のＳがカラッポのままの状態が許されず，*there* がその位置に

置かれて，これで存在をあらわしていると言えよう。Quirk and Greenbaum はこの *there* を empty 'slot-filler' としている。[6]

（この *there* をいま一応主語（的なもの）とすると）これと同じように，実質的な意味を述語の部分であらわす形式としては，非人称構文の *it* がある。*There* と *it* が，ともに形式語 (formal word) であることは，古い時代に *There is* の代りに，*It is* が用いられていたという事実もこれを保証している。

(5) *Hit arn* aboute on this bench bot berdles chylder.
[*There are* about on this bench only beardless children.]

(6) Cosin, *it is* no dealing with him.
[Cosin, *there is* no dealing with him.]

1.2. *There* 構文は，いま述べたように，あるものゝ，存在をあらわす単純判断にすぎないのであるから，当然のことながら，次のように不定の限定詞 (Indefinite determiner) を伴った意味上の主語を導くことが多い。

(7) There is *a* flaw in the mould.

(8) There were *few* people present.

(9) There was *no* place for a housekeeper in my three miserale rooms.

そのほか，any, enough, ever, little, many, much nothing, several, some などであって，代名詞のときでも(10)(11)のように不定的な内容をもつものが多い。

(10) There was *so much* of it that I wondered whether she had not pinned on a braid of her shorn-off hair,.....

(11) There were *two* of them, with rifles slung on their backs.....

通常は，以上見てきたように，There is には *There* 構文の性質の上から不定のものが続行するのであるが，特定なもの，つまり，固有名詞や定冠詞を伴った意味上の主語が続行することがある。

固有名詞は situation に関係なく，はじめから特定なものであり，There is John by the gate. などとは言わないとされている[7]が，現実には(12)(13)のような例がある。主として「例を挙げる場合」であると言われる。

(12) There was *Flora*, of course.

(13) There were *the Robinsons*, *the Brewers*, *the Smiths*, and *the Greenfields* at his birthday party.

そして，固有名詞以外では，

(14) There is *the book* on the desk.

(15) There's *the bell*.

(16) Before we entered the centre of Kagoshima we stopped for an hour or so to visit Iso Park, where there was formerly *the residence* of the Shimazu clan.

形容詞類 (Adjectival) によって修飾されて（その修飾語句が存在しなければ不定冠詞もしくは無冠詞となるのが明確である場合），定冠詞 *the* を伴うものは数多くある。[8]

(17) There is *the lovely* difference between boxwood and pear wood, the male and the female of the wood-engraver's world.

(18) On the other hand, there is *the professor* who loves literature and who can communicate his delight in it.

1.3. さて，そもそも，定冠詞 *the* とは何を意味するのであろうか。ひとことで言ってしまえば，*the* を伴った主語は旧情報を意味するのである。*There* 構文なるものが，あるものの存在がはじめて提示されるときに使用される言語形式であると言っておいて，かつ，そのあるものの中に旧情報を含むというのではこの意味において確かに矛盾を招いていることになる。

しかし，人間が言語を伝達手段として使用する際に，聞き手（あるいは読者）にとっての新情報が，突然に，旧情報に関する知識が全く存在しないところに提出されたのでは伝達の効を奏しない。何かその旧情報に関する知識を引き出す「とっかかり」のようなものが存在するはずであると考えてよかろう。*There* 構文における定冠詞を伴った主語は，一般に考えられているような，話し手にも聞き手にも，たちどころに明確にわかるような事物を示すのではなく（示し得ない），まさに安井（1974）の言うように，

「こういう場合の定冠詞は，『場面または文脈をよく見よ。そうすれば，定冠詞のついた名詞によって示されるものが，それとわかるはずである。』というさしずをしているものと見ることができる。」そして「話者の側では，聞き手にとって，あるものが旧情報でなくても，ちょっと捜せばすぐそれとわかるであろうという見当がつけることができるなら，定冠詞を用いるのである。」[9] このさしずを受けて，聞き手が「捜す」過程で，それを容易に可能ならしめるのは，その名詞句に限定を与える *of*-phrase であり，制限的関係詞なのである。[10]

1.4. *There* 構文における主動詞は *be* 動詞の諸形 (is, was, are, were) が普通であって，*be* 動詞以外の動詞は，その使用頻度もきわめて低いと言えそうであるが，[11] 現実に次の例文のようなものがあることは事実であり，かつ，それらの文が非文法的でない以上は，これらの動詞を続行する *There* 構文も考慮しなくてはならないであろう。

(19) Within ten minutes *there came* a heavy knock at the front door.

(20) And often *there recurred* to him then that queer feeling that his life with all its misery was nothing but a dream,...

(21) Now and then *there rose* from below the shrill voices of the servants scolding each other in Welsh.

ここに挙げた come, recur, rise のほかにも次のような動詞が *There* 構文で主動詞になることがある。

appear, arise, arrive, creep, dwell, ensue, emerge, enter, exist, fall, follow, hang, happen, lie, live, pass, remain, rise, ruch, seem, shine, sit, stand; cross a person's path (=come), take place (=happen); etc.

これらは，一般に，漠然とした「存在 ('exist')」「出現 ('come into existence')」の意味要素をもつ自動詞（句）群であると言える。[12]

このように，主動詞に *be* 動詞以外の動詞がくる例は，その数があまり多くないのであるが，助動詞（相当詞）が用いられる例はかなり多い。

(22) ....., and I find that during the past quarter *there have been* no

less than twenty-three trunk calls to London, none of which was sent by me or by members of my family.

(23) In a long happy marriage *there must be* moments when one turns a blind eye.

(24) *There will be* a prize of half a crown for the longest essay, irrespective of any possible merit.

(25) For prayer, Gumbril reflected, *there would be* Dunlop knees.

1.5. *There* 構文における *there* は，通常，主語の位置を占めるために，次のような点で主語であるかのような扱いをうける。

(a) 疑 問 文：

(26) *Is there* room for me in the car?

(27) *Were there* bridges to join the two worlds?

(b) 付加疑問文：

(28) There was a commotion, *wasn't there*?

(29) There's nothing wrong, *is there*?

(c) 解 答 文：

(30) Are there any cherries?—Yes, *there are.*

(d) 不 定 詞：

(31) And God said, Let *there* be light: and there was light.

(32) I don't want *there* to be any misunderstanding.

(e) 動名詞・分詞：

(33) No one would have dreamed of *there* being such a place.

(34) This might account for *there* being something odd about Bags.

(f) 受 動 態：

(35) Beyond, *there could be seen* the rim of a hill.

(36) Later in the day *there was announced* Roy Bauer.

(g) 主格関係代名詞の省略：

(37) He told her he thought it the most deadly occupation〔ϕ〕there was.

(38) I've told you all 〔ϕ〕 there is to tell.

(h) 主語と動詞の不一致：

(39) There *was* my mother and Mr. and Mrs. Bundle, and their son, ..., and Mrs Bundle's mother,...., and Mrs Aber.....and old Major Ending,.....

(40) There *was* my mother and the Bundles and Mrs. Crump talking away quite unconcernedly while I sat there wrestling with this sudden assault of doubt.

There には以上のような主語的 behavior が認められる。従って，三上は「日本の文法界には主述関係を信奉し，「主語」をもったいながる傾向がある」が，そろそろ「疑似主語性」の「疑似」を削って，*there* の「主語性」を認めるべきであると言い，ペンギン辞典の

there: *Impersonal pronoun* used as subject of verb (*especially* be) to introduce a sentence.

を引いたりして，*there* を（第3人称）の非人称不変化代名詞として，次のような paradigm を認めている。[13]

he	him	his
it	it	its
there	there	—

There の主語性云々というような議論になるとき，結局は，「主語とは何か」ということの問題に戻らざるを得ない。これが思いのほかやっかいで，明解な定義が存在しないとすれば，そう簡単にこの結論も生れてこないということになる。たゞ，Chomsky の定義に従えば，きわめて簡単である。彼によれば，主語とは，要するに，Sを開いたときに最初に得られる NP ということであるから，当然 *there* は主語ということになる。しかし，こうして求められる主語とは「深層構造における主語」であることを考えるなら，また問題は原点に戻ってしまい，現在考えられている分析によれば，There is a book on the desk. は a book is on the desk から派生することになっているのであるから，やはり，主語は *there* ではなくて，a book であるということになってしまう。

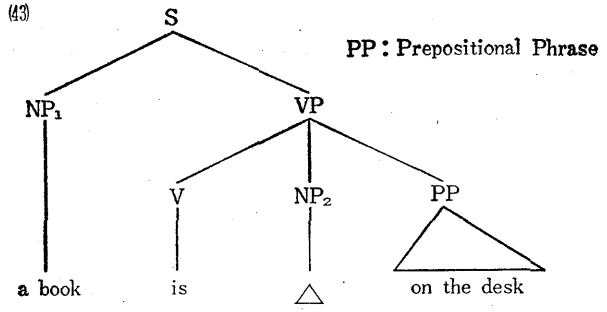
2.0. さて次に変形文法における *There* 構文の扱い方とその問題点をさぐってみることにする。

2.1. 変形文法では，*There* 構文は，*There*-insertion（*There* そう入変形）という変形規則を適用することにより，派生されるということになっている。以下，この点に関する安井稔氏の研究を参照し，まとめてみよう。[14]

(41)(=1)　a book is on the desk
(42)(=2)　there is a book on the desk

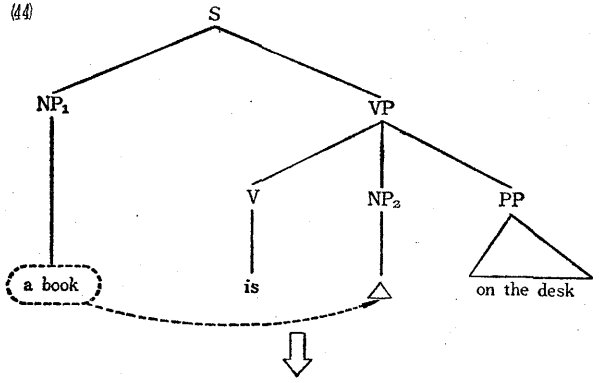
つまり，(42)は次の(43)のような深層構造から派生すると考えられている。

(43)

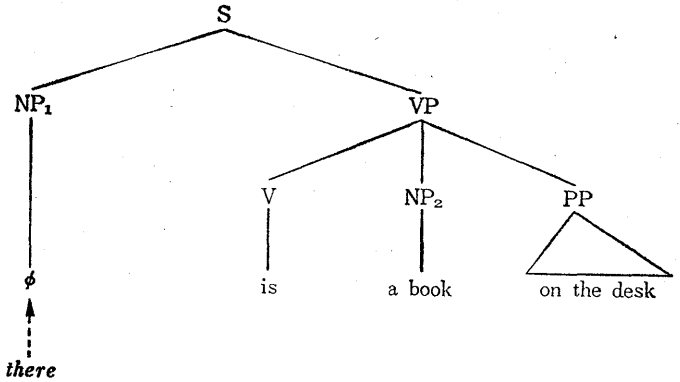


つまり，この変形規則は，述語動詞が *be*(is) で，主語が不定名詞句 (a book) である場合に，その主語名詞を *be* の直後に移し(44)，次に，空になった主語の位置に *there* をそう入する(45)，という二つの操作を含むことになる。

(44)



(45)



Emonds はこれを，

i. 不定主語移動変形 (Indefinite subject movement)(44)

ii. *there* そう入変形 (*There*-insertion)(45)

という二つの変形規則に分けている。

この変形規則の定義でいくと，*There* 構文が派生されるためには，(a)主動詞が be 動詞で，(b)主語が不定名詞句でなければならない。しかし，前述のように，(a)について言えば，主動詞に be 動詞以外の動詞がくることがある。(b)について言えば，同様に，(12)—(18)のような不定限定詞をとらずに定冠詞をとる名詞句を意味上の主語としてもつ文が存在する以上は，これらの文の派生をも可能にする変形規則でなくてはならない。

また，この変形規則は，(43)から(42)を派生するだけでなく，(46)から(47)を派生するとも考えられている。

(46) A boy is running along the street.

(47) There is a boy running along the street.

しかし，(46)と(47)とでは意味が異なり(46)は「行為」を表わし，(47)は「存在」を表わしている)，*There*-insertionが両者を関係づけてしまうのはおかしい。また Emonds に従うなら，

(48) There is a child resembling John.

を派生するために，

(49) *A child is resembling John.

のような，状態動詞が進行形に用いられている不適格な深層構造を考えなければならなくなる。

(47), (48)を派生する構造は別に考えられているが,[14] そして,「*there*-insertion は，本質的に，(48) のような構造にのみ適用されると考えるべきである」[16] としても，依然として *there*-instertion が適用され得る条件(a)(b)を満たさない *There* 構文が問題として残る。

Condition: a) *Be* directly follows *Tns.* (i.e. There is an indefinite NP (term 2) and a *be* directly after *Tns.*)

b) 2 has an indefinite determiner.

There-insertion

$$\text{S.D.}\ \#(\text{PreS})\text{—NP—}\left\{\begin{array}{l}\text{Aux——}\textit{be}\text{——W}\\ \begin{array}{l}\text{[X}\\ \text{Aux}\end{array}\text{——}\textit{be}\text{——Y]——Z}\end{array}\right\}$$

	1	2	3	4	5	6	opt. ⇨
S.C.	1	*there*	3	4+2	5	6	

〈その１の〉おわりに。

本稿では，従来の文法家たちの研究の助けを借りて，*There* 構文なるものについて，筆者なりにまとめてみたことになる。筆者の関心の中心は，(i) *There* 構文の意味構造，(ii) *There* の主語的 behavior，そして，〈その２〉で取り扱われることになっている変形文法における分析に関連して，(iii) 定冠詞を伴う（意味上の）主語が続行するという問題，(iv) *There* の次に来る *be* 以外の動詞の問題，にあった。

現在までのところ，変形文法においては，特にこの (iii) と (iv) については open question であるように思われる。〈その２〉ではこの解明を試みたい。

〈to be continued〉

Notes:

1. ［意味上の］主語に特別の強勢を与えようとする場合には，平叙文においても，それは次のように there の前に出る。
Some few there were who regretted the change of so vereigns. (Hosoe(1971))
これは強調のために語順が転倒したものであり，*There* 構文の基本形は，平叙文においては there が文頭に立つと考えて差しつかえない。
2. Ichikawa (ed.) (1965), Ishibashi *et al.* (eds.) (1973), Otsuka (ed.) (1970) では 'Preparatory *there*' が entry word として採用されている。
3. この is は完全自動詞。なお，普通には，A book is on the desk. などとは言わないらしく，「文法的には正しいが慣用的でない。主語が不定の (indefinite) ものであるときには，There is a book on the desk. のように There is (or are) ……の文型の方が好ましい (preferable) 言い方である」(Hornby (1965) *A Guide to Patterns and Usage in English* vii & p. 72.) が，What's on the wall? の答として，A clock is on the wall. と There's a clock on the wall. の両方を挙げて，どちらでもよいと言っているものもある。(Wright & McGilliveray (1955) *Let's Learn English* p. 36.) また，一般的には，there を用いない(1)型の方が，there を用いる(2)型より文語的である，とも言われる。
4. 例文の出典は別記（ページは省略）。なお，例文中のイタリックスは筆者による。
5. Nakajima (1961) pp. 125–126.
6. Quirk & Greenbaum (1973) p. 418.
7. Soranishi (1963) p. 105.
8. ただし，silence に形容詞がつくと，be 動詞が状態を示そうと，継続を示そうと，普通不定冠詞がつく。
cf. There was a prolonged silence.—E. Waugh *Decline and Fall*
There was a slight hush.—*ibid.*
9. Yasui (1974) p. 115.（直前に，おそらくは，*Thd door* に関する知識が与えられることなく発話されたと仮定される）The door opened. という文について説明されている。
10. 「定冠詞が後方照応的に，制限的関係詞節とあいまって，旧情報を提示する重要な装置をなしている点」(*ibid.*) については，拙稿「いわゆる Contact Clause について——定冠詞 *the* の機能——」『英米文学研究（第10号）』(pp. 165–176.) を参照。
11. たとえば，Matsunami (1964) 'FW *there* 構文'『英語史研究』(pp. 115–130.) によれば，*Twenty Grand Short Stories* (pp. 208) を Corpus として be 以外の主動詞の例は皆無であったという。筆者のデイタにおいても，Corpus は絞れないが，その数はきわめてわずかであった。

12. 他動詞が目的語を伴って用いられる例は，take place (=happen) などのほかはまずないと言ってよい。(Otsuka (ed.) (1970))
13. Mikami (1960).
14. Yasui (ed.) (1975) pp. 588-589.
15. (47) (48) はそれぞれ次の(47)'(48)'から派生されると考えられる。(Yasui (ed.)(1975))
    (47)' [a boy who is running along the street]$_{NP}$ [[is]$_{V}$ [△] $_{NP}$]$_{VP}$
    (48)' [a child who resembles John]$_{NP}$ [[is]$_{V}$ [△] $_{NP}$]$_{VP}$
16. Yasui (ed.) (1975).

Sentences used in our examples are adopted from:

(3) E. Waugh: *Decline and Fall*
(5) *Sir Gawayn and the Grene Knyght* (Nakajima (1961))
(6) Marlowe: *Edward the Second* (about A.D. 1591, ed. 1594). (Curm (1931))
(7) G. Greene: *The Quiet American*
(9) I. Murdoch: *The Italian Girl*
(10) *ibid.*
(11) E. Hemingway: (Ishibashi *et. al.* (eds.) (1973))
(12) I. Murdoch, *op. cit.*
(13) (Sasaki (1952))
(15) E. Waugh, *op. cit.*
(16) J. Kirkup: *An English Traveller in Japan*
(17) I. Murdoch, *op. cit.*
(18) R. Lynd (Ishibashi *et al.* (eds.) (1973))
(19) H.R.F. Keating: *The Dog It was that Died* (Konishi (1974) *An English Collocational Dictionary on Prepositions*)
(20) W.S. Maugham: *Of Human Bondage*
(21) E. Waugh, *op. cit.*
(22) E. Waugh, *op. cit.*
(23) I. Murdoch: *A Fairly Honourable Defeat*
(24) E. Waugh, *op. cit.*
(25) A. Huxley: *Antic Hay*
(26) A.S. Hornby (ed.): *The Advanced Learner's Lictionary of Current English*

(27) A. Huxley, *op. cit.*

(28) D.M. Perlmutter: 'The Two Verbs *Begin*' (note 6) in R.A. Jacobs & P.S. Rosenbaum (eds.) (1970)

(29) R. Quirk & S. Greenbaum (eds.) (1973)

(30) Nakajima (1951) (Mikami (1960))

(31) *Genesis* i.3.

(32) Bennett: *Clayhanger* (Nakajima (1951))

(33) R. Kipling: *The Jungle Book* (Otsuka (ed.) (1970))

(34) E. F. Benson: *David Blaize* (Otsuka (ed.) (1970))

(35) F.A. Swinnerton: *Summer Storm* (Otsuka (ed.) (1970))

(36) A. Waugh: *Wheels within Wheels* (Otsuka (ed.) (1970))

(37) K.A. Porter: *That Tree*

(38) Nakajima (1951) (Mikami (1960))

(39) E. Waugh, *op. cit.*

(40) *ibid.*

REFERENCES

Burt, Marina K. 1971. *From Deep to Surface Structure.*

Curm, George O. 1931. *Syntax.*

Hosoe, Ikki (細江逸記).(New ed.) 1971. *An Outline of English Syntax* (『英文法汎論』).

Jacobs, Roderick A. and Rosenbaum, Peter S. 1968. *English Transformatinal Grammar.*

———. 1970. *Readings in English Transformational Grammar.*

Jespersen, Otto. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles.* Part VII.

———. 1933. *Essentials of English Grammar.*

Kajita, Masaru. (梶田　優). 1974.「変換の定義と意味」『英語文学世界(1月号)』.

———. 1974. *Grammar II* (『文法論 II』) (*Outline of English Linguistics* Vol. 4. (英語学大系・第4巻))

Kanaguchi, Yoshiaki (金口儀明). 1968. 『主題と陳述（上)』(英語の語法・表現篇第7巻).

Kuno, Susumu (久野暲). 1972. *The Structure of the Japanese Language.*

———. 1973.『日本文法研究』.

Langendoen, D. Terence. 1970. *Essentials of English Grammar.*

Matsunami, Tamotsu(松浪有). 1964.「FW *there* 構文」(『英語史研究』 pp. 115–130.).

McCawley, James D. 1973. "English as a *VOS* Language" in *Grammar and Meaning*. pp.211–228.

Mikami, Akira (三上章). 1960.『象は鼻が長い』.

Nakajima, Fumio (中島文雄). 1961.『英文法の体系』.

Onions, Charles T. (Revised ed.) 1971. *Modern English Syntax.*

Quirk, Randolph and Greenbaum, Sidney. 1973. *A University Grammar of English.*

Soranishi, Tetsuro (空西哲郎). 1963.『英語・日本語』.

Yasui, Minoru (安井稔). 1974.『英語学の世界』.

Zandvoort, R.W. (New ed.) 1962. *A Handbook of English Grammar.*

Dictionaries

Ichikawa, Sanki (市河三喜) (ed.). (Revised & Enlarged ed.) 1965. *The Kenkyusha Dictionary of English Philology* (『英語学辞典』).

Ishibashi, Kotaro (石橋幸太郎) *et al.* (eds.). 1973. *Seibido's Dictionary of English Linguistics* (『現代英語学辞典』).

Kanaguchi, Yoshiaki (金口儀明). 1970. *A Handbook of English Article Usage* (『英語冠詞活用辞典』).

Otsuka, Takanobu (大塚高信) (ed.). (Revised & Enlarged ed.) 1970. *Sanseido's Dictionary of English Grammar* (『英文法辞典』).

Yasui, Minoru (安井稔) (ed.). (Revised & Enlarged ed.) 1975. *Kenkyusha's Dictionary of New Linguistics* (『新言語学辞典』).

[24th September 1975]